

後継ぎ、

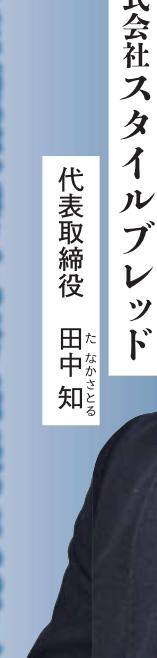
ふんばる²

冷凍パンに 隠された “覚悟”

株式会社スタイルブレッド

代表取締役 田中知

1990年代後半、地元経済に元気がなくなるなか、
冷凍パンに市場性を見いだした田中知社長



に充てる。そのせいか、「両親と退職した人たちとは、いまでも年二回バス旅行をしています。人生を楽しんでます」。

米国

こう話す田中氏は、地元の高校を卒業後、東京にあるパン職人の専門学校に一年間学ぶ。「パンの本場は欧洲だが、自分はどうしても米国に行きたい」。若者はこう考え、専門学校の先輩のつてを頼りに、ニュージャージーのパン屋に働く。

「ハドソン川を挟み、ニューヨークのマンハッタン島の向かいでした。ヒスパニック系の移民たちに交じり、二年間パンを焼いてました」。

当時、日本はバブルの真っただ中。一方、米経済は「双子の赤字」から惨憺たる状況だった。

二年後に帰国して群馬県内の製パン工場に一年間勤め、実家で働き始めたときは二三歳になっていた。同じ桐生市内に、北関東を代表するフランス料理店があり、パンを納入し

出会い

二年後に帰国して群馬県内の製パン工場に一年間勤め、実家で働き始めたときは二三歳になっていた。同じ桐生市内に、北関東を代表するフランス料理店があり、パンを納入し

父の心配

「俺は心配だ。代替わりした途端に、

潰れてしまうぞ。本当に大丈夫な

のか……」

一九六八（昭和43）年生まれの田中知氏が、『街のパン屋さん』だった有限会社田中製パン所の第四代社長に就いたのは二〇〇五（平成17）年。三代目を務めていた父親は

常々「おまえは好きなようにやっていい」と言っていた。なのに、事業

継承した直後も「心配だ」を連発し続ける。というのも、四代目は翌

○六年に、ハード系の冷凍焼成パンの製造販売会社へと業態を一新させる決断をしたからだ。全国のどこにでもある典型的な『パン屋さん』が、見たことも聞いたこともない冷凍パンに乗り出すというのだから、心配するのは当然だったう。

ジネスをスタートさせていく。

社長就任時には、田中氏が子ども頃から勤めていたパン職人や販売のパートさんも五人ほどいた

一方、若手もやはり五人程度いた。新事業参入を前に、社員を一人ひとり呼んでは、事業の説明を行う。

が、冷凍パン事業が始まると同時に、古参社員は皆辞めていった。どうやら、田中氏が経営をしやすいようになると、父親が水面下で退職を説得したようだった。内部留保はすべて取り崩して、彼らの退職金

1968年（昭和43年）生まれの田中知氏が、『街のパン屋さん』だった有限会社田中製パン所の第四代社長に就いたのは2005年（平成17年）。三代目を務めていた父親は常々「おまえは好きなようにやっていい」と言っていた。なのに、事業継承した直後も「心配だ」を連発し続ける。というのも、四代目は翌

1990年代後半、地元経済に元気がなくなるなか、冷凍パンに市場性を見いだした田中知社長

